

## 2026年度フィールドスタディ・地域活性化論実施報告(ホームページ掲載)

|      |                               |     |      |
|------|-------------------------------|-----|------|
| 科目名  | フィールドスタディ C                   | 教員名 | 石渡幹夫 |
| 実習先  | 石川県能登町他                       |     |      |
| 実習期間 | 2026 年 6 月 26 日 (金) ~29 日 (月) |     |      |
| テーマ  | 能登半島地震からの復興                   |     |      |

### 目的(実習のねらい):

2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震は、マグニチュード 7.6 の地震と、それに伴う津波・土砂災害により甚大な被害をもたらした。さらに同年 9 月の豪雨災害が復興途上の被災地を再び襲い、複合災害の様相を呈している。死者・行方不明者は約 700 名のほり、16 万軒以上の住宅が被害を受けた。現在も多く被災者が仮設住宅での生活を余儀なくされている。

本実習は、能登半島の歴史的・文化的背景と、震災前から地域が抱えていた課題を理解したうえで、現地調査を通じて復興の現状と課題を学ぶことを目的とした。

### 実習報告:

**被害地視察:** 輪島市・能登町・珠洲市の現場を回することで、テレビや SNS ではわからない、被害の大きさを実感できた。液状化で浮き上がったマンホール、倒壊したままの家屋、崩落により通行止めとなった道路やトンネル、沈下した地盤など、発災から 2 年半を経た今も被害の爪痕が各地に残っていた。損壊家屋の多くは公費解体が進み、大部分は再建がいまだ進んでおらず、更地となっている。大規模火災に見舞われた輪島朝市地区では建物の解体がほぼ終わり、再建に向けたプロジェクトが動き始めていた。



学校での避難生活や復興の歩みについても関係者から話を伺った。商業施設内に開設された輪島朝市の仮設店舗では、営業を再開した事業者から話を聞くことができた。

**仮設住宅訪問とボランティア活動:** 住宅が被害を受け、鶴川仮設団地で暮らす被災者のお宅を訪問し、エアコンのフィルター清掃や網戸の付け替えなどのボランティア活動を行った。住民の多くは高齢者であり、こうした作業に困っておられた。作業を通じて仮設住宅での生活の実情に触れることができた。

学生たちは当初緊張した様子であったが、次第に打ち解け、会話も弾んでいった。被災者からは、地震当時の体験だけでなく、現在の暮らしや地域への思いも聞くことができた。「家は失ったが、人とのつながりが支えになった」「学生が来て話をしてくれるだけで元気が出る」といった言葉が、学生の心に強く残ったようである。



**能登の文化と歴史：**能登では、小さな棚田が幾重にも重なる白米千枚田や、黒瓦・白壁の家並みが、里山・里海の特徴的な景観を形づくっている。千枚田では、地震と豪雨で大きな被害を受けたものの、地域住民の努力と外部からの支援により復旧が進み、米づくりも徐々に再開されていた。

集落ごとに受け継がれてきた祭りは、地域のアイデンティティの核となっている。復興途上の厳しい生活のなかでも、祭りの再開が地域の支えとなっていることを学んだ。



**古民家を活用した宿泊施設：**伝統的な能登様式の古民家に宿泊した。黒い屋根瓦と白壁が特徴で、太く立派な柱や梁が使われ、広い部屋がいくつも連なる重厚な作りである。襖を取り払えば冠婚葬祭にも用いられるとのことであった。夜には屋外にホタルが舞い、初めて目にする学生もいた。

宿泊先を運営する一般社団法人「春蘭（しゅんらん）の里」は、約 50 軒の農家民宿を束ね、観光客や修学旅行生を受け入れている。地域の雇用創出や農産物の消費につながっており、地域活性化の一翼を担っている。



**社会関係インフラとしての公民館：**公民館は平常時の交流の場であるだけでなく、防災の話し合いや訓練の場ともなっていた。地震発生の際は避難所や情報共有の拠点として機能していた。災害への備え、発災時の対応、そして復興のいずれの局面においても地域コミュニティが重要であること、そして能登町では公民館がその中心的な役割を果たしていることを実感した。



**成果：**

本実習を通じて学生は、報道や資料だけでは把握しきれない被災地の現状を自らの目で確かめ、被災者との対話から復興の課題と地域のつながりの力を学んだ。震災以前から地域が抱えていた人口減少、少子高齢化、過疎化といった課題は、震災によってさらに加速しており、復興の進展を遅らせる要因となりかねないことを認識した。一方で、被災者との交流や公民館の訪問を通じて、災害の被害を減らし、復興を進めるうえで地域コミュニティが果たす重要な役割を学んだ。復興とは、インフラや施設・建物の再建にとどまらず、地域のアイデンティティである歴史・文化を生かしながら、人々の生活と地域コミュニティを再建していく営みであることを理解した。過疎化・高齢化が進む地域における復興のあり方は、日本各地の地方が共通して直面する課題でもあり、今後の学びにつなげていきたい。

以上

石渡幹夫 特任教授